

中小野貝塚

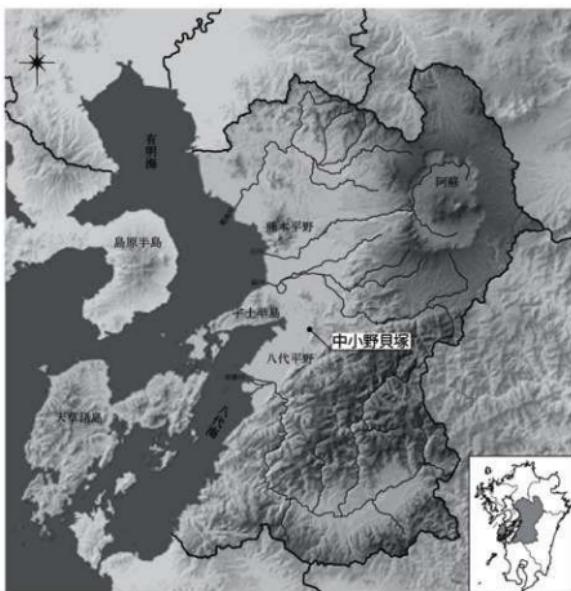
一般県道下郷北新田線社会資本整備総合交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

2022

熊本県教育委員会

中小野貝塚

一般県道下郷北新田線社会資本整備総合交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告



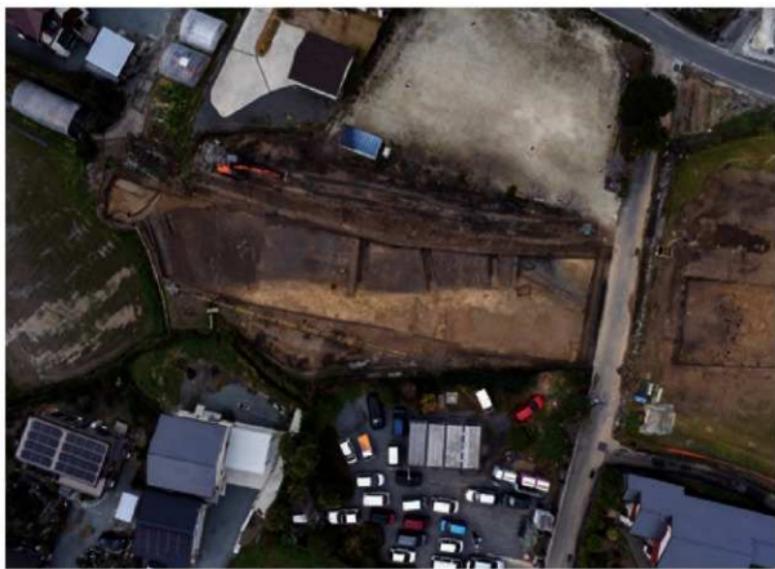
2022

熊本県教育委員会



上：中小野貝塚遠景（南から） 下：中小野貝塚調査区全景（俯瞰）

図絵 2



上：中小野貝塚調査1区（俯瞰） 下：中小野貝塚調査2区（俯瞰）

序 文

熊本県教育委員会は、令和2年度（2020年度）に一般県道下郷北新田線社会資本整備総合交付金事業に伴い、中小野貝塚の発掘調査を実施しました。

中小野貝塚は、熊本県宇城市小川町中小野地内にあり、宇城市豊野町下郷から娑婆神峠を通り小川町中小野に至る道路の延長線上になります。

今回調査をした範囲では遺跡名にある貝塚は確認できませんでしたが、道路や溝などの遺構が確認できました。また、従来谷であったところに多量の遺物を確認でき、当時の生活を知ることができました。このような資料は当時の人々の暮らしを理解する上で貴重な資料となるものと思われます。

この報告書が県民の皆様をはじめ多くの方に活用され、文化財に関する関心と理解を深めていただき、郷土の歴史理解の一助となれば、喜びに堪えません。

最後に、調査の円滑な実施に御理解と御協力を頂いた熊本県土木部道路整備課ならびに貴重な御指導・御助言を頂いた諸先生に対して厚くお礼申し上げます。

令和4年（2022年）3月15日

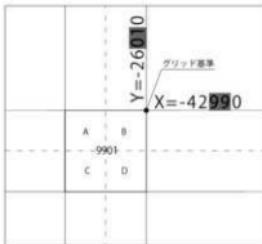
熊本県教育長 古閑 陽一

例　　言

- 1 本書は、令和2年(2020年)10月13日から令和3年(2021年)3月15日まで実施した熊本県宇城市小川町中小野地内に所在する中小野貝塚の発掘調査報告書である。
- 2 遺物の整理は、熊本県文化財資料室で実施した。
- 3 現地調査は、熊本県教育庁教育総務局文化課が実施し、発掘調査補助業務を株式会社島田組に委託した。
- 4 土器の洗浄・注記・接合については、株式会社島田組に委託した。
- 5 土器の実測・トレースは、春川香子が行った。
- 6 土坑S006貝集積部貝試料の貝種同定について、株式会社古環境研究所に委託した。
- 7 本書の執筆は、後藤克博が行った。
- 8 本書の編集は、後藤が担当し、文化財資料室、会計年度任用職員の協力を得て実施した。
- 9 本書に掲載した遺物・実測図・写真は、熊本県文化財資料室で保管している。

凡　　例

- 1 遺跡名は、中小野貝塚である。
- 2 遺跡番号は、344-012である。
- 3 調査にあたって調査対象地に平面直角座標系に基づいて、5m間隔にグリッド杭を設置した。グリッド名は下図の「9901」のように、10m毎の座標値の一の位を切り捨てて下二桁をとり、原点に近い方の角を名称とする。10mのグリッドを5mで4分割し、下図のようにアルファベットのA～Dを付した。



- 4 本書では、調査1区・調査2区を通して新しく遺構番号を付けた。
- 5 遺構実測図は図中に縮尺を記している。出土遺物実測図は、縮尺3分の1で掲載している。
- 6 土器実測図の断面は須恵器は黒で塗色し、内外面の網掛けはスス付着範囲を示す。

目 次

口絵	
序文	
例言・凡例	
第Ⅰ章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯・事業計画の概要	1
第2節 調査及び整理の体制	1
第3節 発掘調査の経緯	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第Ⅲ章 調査の方法と成果	5
第1節 調査の方法	5
第2節 層序	5
第3節 遺構及び遺物	16
1 遺跡の概要	16
2 遺構及び遺物	16
出土遺物観察表	
第Ⅳ章 自然科学分析	30
中小野貝塚出土貝類同定業務報告	
第Ⅴ章 総括	33
第1節 調査の成果	33
第2節 今後の課題	33
写真図版	
抄録	

挿図目次

- | | | | |
|------|--------------------------------|------|--------------------|
| 第1図 | 中小野貝塚周辺遺跡地図1 | 第14図 | 道路S001・S002実測図 |
| 第2図 | 中小野貝塚周辺遺跡地図2 | 第15図 | 溝S004実測図 |
| 第3図 | 中小野貝塚調査区位置図 | 第16図 | 調査1区土坑実測図1 |
| 第4図 | 中小野貝塚グリッド配置図 | 第17図 | 調査1区土坑実測図2 |
| 第5図 | 調査1区遺構配置図 | 第18図 | 調査1区土坑実測図3 |
| 第6図 | 調査1区北壁土層断面図1 | 第19図 | 調査1区柱穴実測図1 |
| 第7図 | 調査1区北壁土層断面図2 | 第20図 | 調査1区柱穴実測図2 |
| 第8図 | 調査1区西端中央部土層断面図 | 第21図 | 調査1区遺構等出土遺物実測図 |
| 第9図 | 調査2区遺構配置図 | 第22図 | 調査2区谷部土器流れ込み状況 |
| 第10図 | 調査2区北壁土層断面図1 | 第23図 | 土坑S009実測図 |
| 第11図 | 調査2区北壁土層断面図2 | 第24図 | 土坑S009出土遺物実測図 |
| 第12図 | 調査2区トレンチ1～3・5土層断面図、谷部東端縦断土層断面図 | 第25図 | 土坑S010・S011実測図 |
| 第13図 | 調査2区トレンチ4・6土層断面図 | 第26図 | 土坑S010・S011出土遺物実測図 |

表目次

第1表 中小野貝塚周辺遺跡地名表

第2表 出土遺物観察表

図版目次

- 図版1
上 中小野貝塚遠景(南から)
下 中小野貝塚調査区全景(俯瞰)
図版2
上 中小野貝塚調査1区(俯瞰)
下 中小野貝塚調査2区(俯瞰)
図版3
1. 道路S001完掘状況(北から)
2. 道路S002、土坑S003完掘状況(北から)
3. 溝S004完掘状況(東から)
4. 溝S004完掘状況(西から)
5. 土坑S005完掘状況(南から)
6. 土坑S006貝殻積検出状況(南から)
7. 土坑S006貝層断面(西から)
8. 土坑S006完掘状況(南から)
図版4
1. 土坑S007完掘状況(西から)
2. 土坑S008遺物出土状況(西から)
3. 土坑S008完掘状況(西から)
4. 調査1区西側落込み部完掘状況(北から)
5. 土坑S009遺物出土状況(俯瞰)
6. 土坑S009完掘状況(俯瞰)
7. 土坑S010完掘状況(西から)
8. 土坑S011完掘状況(俯瞰)

- 図版3
1. 土坑S011完掘状況(南から)
2. 調査2区谷部検出状況(東から)
3. 道路S001出土遺物
4. 道路S001出土遺物
5. 道路S002出土遺物
6. 土坑S003出土遺物
7. 土坑S005出土遺物
8. 土坑S006出土遺物
図版4
1. 土坑S007出土遺物
2. 土坑S008出土遺物
3. 土坑S008出土遺物
4. 土坑S008出土遺物
5. 柱穴P003出土遺物
6. 9606Dグリッド出土遺物
7. 土坑S009出土遺物
8. 土坑S009出土遺物
図版5
1. 土坑S010出土遺物
2. 土坑S011出土遺物

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯・事業計画の概要

中小野貝塚は、熊本県宇城市小川町中小野地内にあり、調査面積は 2,237m²である。調査は令和 2 年（2020 年）10 月 13 日から令和 3 年（2021 年）3 月 15 日まで実施した。

第2節 調査及び整理の体制

発掘調査は、熊本県県央広域本部宇城地域振興局長の依頼を受け、熊本県教育委員会が実施した。調査体制は以下のとおりである。

発掘調査（令和 2 年度（2020 年度））

調査主体 熊本県教育委員会

調査責任者 中村誠希（文化課長）

調査総括 長谷部善一（課長補佐）、宮崎敬士（主幹（文化財調査担当））

調査事務局 伊藤 昭（審議員）、津田光生（主幹（総務担当））、佐藤虹夏、大石ひとみ（以上、主事）

調査担当 中村幸弘（参事）、豊永結花里（学芸員）

整理作業（令和 3 年度（2021 年度））

整理主体 熊本県教育委員会

整理責任者 宮崎公一（文化課長）

整理総括 長谷部善一（課長補佐）、宮崎敬士（主幹（文化財調査担当））

整理事務局 後藤和也（課長補佐）、堀 義之（主幹（総務担当））、佐藤虹夏、大石ひとみ（以上、主事）

整理担当 後藤克博（文化財保護主事）、春川香子、稻葉貴子、唐木ひとみ、梁出直美（以上、会計年度任用職員）

第3節 発掘調査の経緯

1 調査に至る経緯

熊本県宇城市小川町中小野を通る一般県道下郷北新田線社会資本整備総合交付金事業の計画がなされ、平成 27 年（2015 年）12 月 11 日付けで熊本県県央広域本部宇城地域振興局から熊本県教育総務局文化課長に試掘調査の依頼が出された。これを受け文化課では平成 28 年（2016 年）1 月 27 日に事業区域の一部について確認調査を実施した。調査の結果、遺構及び遺物を確認したため、その結果を宇城地域振興局に通知した。また、令和元年（2019 年）5 月 29 日付けで未調査の箇所について確認調査が依頼され、7 月 16 日、18 日に確認調査を実施した。遺構、遺物等埋蔵文化財の広がりを確認したため、保存が困難であるならば、事前に調査が必要になるため協議が必要と通知した。協議の結果、現地保存は不可能であると結論し、令和 2 年度（2020 年度）に記録保存を目的とした発掘調査を実施することになった。

2 発掘調査の経緯

発掘調査について令和 2 年（2020 年）10 月 13 日に熊本県文化財資料室にて補助業務を受託した業者と打ち合わせを行い、10 月 19 日から調査区の設定及び安全対策を行った。基準点測量は道路の設計が先の震災前の測量であったため、平面直角座標の確認等を GPS で行い、その結果に基づいて基準杭設置を行った。

10 月 23 日から 1 区の東から表土掘削を開始し、11 月 27 日まで実施した。作業員による人力掘削は 10 月 26 日から実施し、12 月 23 日に遺構掘削を終了した。

令和 3 年（2021 年）1 月 5 日から 2 区の表土掘削を開始し、1 月 22 日には 2 区の表土掘削を終了した。調査記録等は調査期間中に随時行い、空中写真撮影は 3 月 2 日に実施した。現地調査は 1 区、2 区の測量補足等を行ったのち 3 月 5 日に完了した。3 月 15 日に事務所を撤去し、現地作業はすべて終了した。

4 整理作業の経過

令和 3 年（2021 年）4 月中小野貝塚整理作業について調査班長と整理担当で工程会議を実施し、遺構実測図のトレース作業及び遺構配置図の編集に着手した。出土した文化財については、土器の洗浄・注記・接合については、株式会社島田組に業務委託した。また、貝の試料分析を株式会社古環境研究所に委託した。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

中小野貝塚は、熊本県宇城市小川町中小野に位置する。宇城市は熊本県の中位に位置する宇土半島南部及び半島の基部に所在する。宇城市小川町中小野は半島の基部、九州山地の西端に位置する。中小野の西側には近世以降干拓地が広がり、さらに西には八代海を望む。中小野の地形は西側に向かって下がっていく。

宇城市には大きな川ではなく、小さな河川が西の八代海に向かって流れ込む。そのためか、水田を利用する溜池が九州山地の裾野に沿って多く点在する。中小野貝塚近くにも前田溜池がある。従来の中小野貝塚の範囲はこの溜池の東部および北部に広がっている。今回の調査区は前田溜池の西側に位置する。

第2節 歴史的環境

1 周辺の遺跡

中小野貝塚周辺の遺跡は、九州山地の裾野に沿って分布し、裾野の南北に連なる。平野部は八代海に臨み、近世以降の干拓地である。

縄文時代の遺跡として、中小野貝塚の周辺には、北から年の神貝塚、中小野貝塚、引地貝塚、大坪貝塚などがあり、なかでも中小野貝塚は縄文中後期の包蔵地として知られていた。

古墳時代の遺跡は、年の神古墳群、西平古墳等の古墳がある。年の神古墳群には1号墳と2号墳があり、宇城市指定の史跡となっている。

古代から中世にかけての遺跡として、小野部田条里跡等、生産遺跡が知られている。

中世の遺跡としては小野城跡、小野莊館跡等の中世城がある。小野莊館跡があった頃、北小野・中小野・南小野にかけては小野莊という中世莊園が存在したという。前田溜池の北側に位置する小野莊館跡は小野莊中世館跡として昭和49年(1974年)に調査が実施され、13世紀から14世紀にかけての中世の館跡として熊本県文化財調査報告第17集『竹崎城』で報告されている。遺跡は掘立柱建物で、正方形の掘り方を有する。小野莊館跡は、莊園を管理する領主(小野大進頼承)の館であったと考えられている。おほのひときよのり

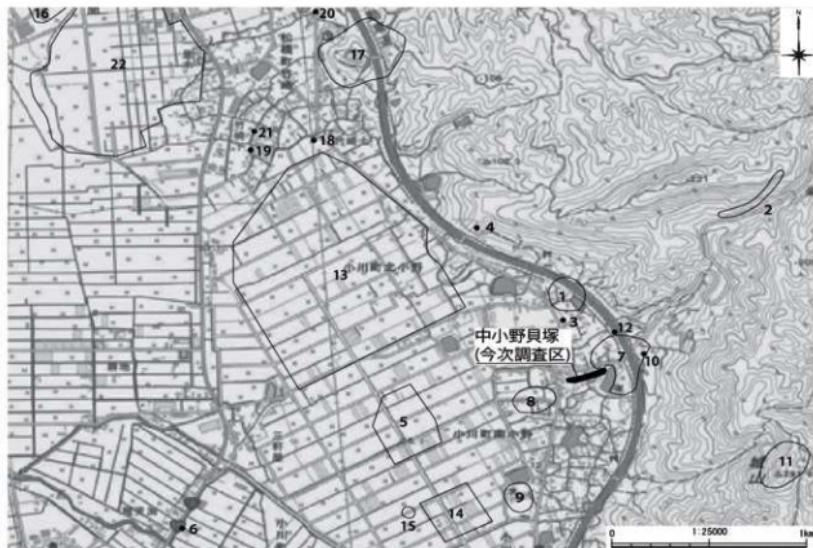
今回の調査区は、南北朝時代、八代から宇土に向かう道と安房神峯を越え豊野・甲佐へ向かう道とさらに隈庄に向かう道との分岐点で、交通の要所であった。

2 既往の調査

中小野貝塚が位置する地域の発掘調査は、九州縦貫自動車道の建設計画に伴い実施されている。昭和49年(1974年)5月1日から8月13日にかけて中小野遺跡の調査が行われた。調査地は宇城市小川町大字中小野・平の山・尾崎で現在九州縦貫自動車道が通っている箇所である。

調査では、6世紀前半から中頃の土師器・須恵器が出土する住居跡が3軒、溝状遺構が1条、瓦器の茶釜と羽釜が出土した柱穴状遺構を1基確認している。貝殻については崖下に落下したものを確認した程度で貝層の広がりは確認されていない。

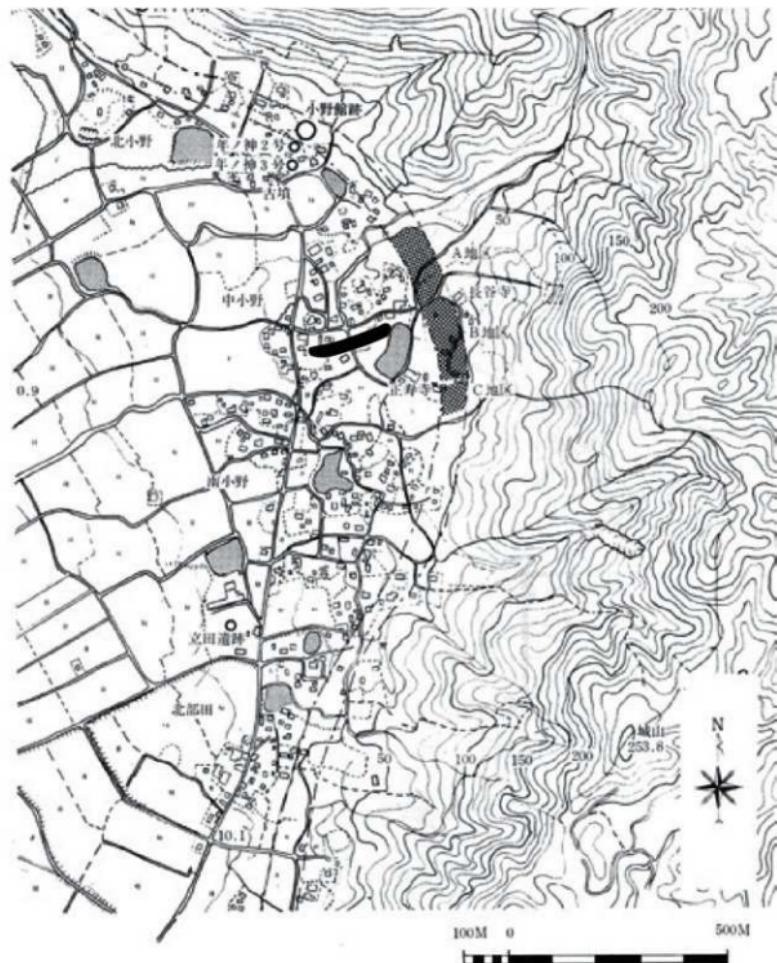
昭和49年(1974年)の中小野遺跡の調査範囲は前田溜池の東側にあたり、今回の調査範囲は前田溜池の西側にあたる(第2図)。この両者と前田溜池の北側を含めた範囲を現在「中小野貝塚」の遺跡範囲としている。昭和49年(1974年)の中小野遺跡調査は熊本県文化財調査報告第39集『中小野・矢ノ下・目抜・アケサン』pp.1-48で報告されている。



第1図 中小野貝塚周辺遺跡地図 1

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	年の神古墳群	古墳	12	小野莊創跡	中世
2	祓媛神跡石置道路	近世	13	条里跡	古代、中世
3	年の神貝塚	縄文	14	条里跡	古代、中世
4	西平古墳	古墳	15	大坪貝塚	縄文、弥生
5	小野部田条里跡	古代、中世	16	宮島貝塚	縄文、弥生
6	鉢護岸	近世	17	竹崎城跡	中世
7	中小野貝塚	縄文、古墳、古代	18	年の神古墳(竹崎古墳)	古墳
8	引地貝塚	縄文	19	竹崎古墳	古墳
9	小野立田遺跡	縄文～中世	20	了徳寺廢寺跡	古代、中世
10	長谷寺	中世	21	竹崎の六地蔵碑	中世
11	小野城跡	中世	22	条里跡	生産

第1表 中小野貝塚周辺遺跡地名表



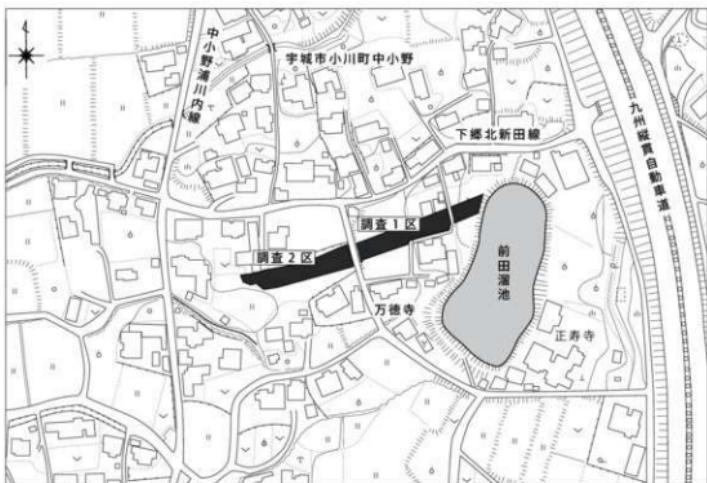
1980年熊本県文化財調査報告書第39集「中小野・矢ノ下・目抜・アケサン」より再掲

第2図 中小野貝塚周辺遺跡地図2

第III章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

調査区は東西に長く、途中、南北に走る市道が2か所で交わる。東から2本目が市道正寿寺線で、調査区のほぼ中央に位置するためこの市道の以東で前田溜池までを調査1区、市道から西側を調査2区と設定した。



第3図 中野貝塚調査区位置図

調査は、調査1区は排土を置ける場所が西端部のみという条件から、調査1区を東・中央・西の作業上の地区として表土掘削を東端から行い人力掘削による排土も重機によって西側へ順次送り、東から人力掘削を終了させた。

調査2区は調査区両脇に排土をある程度積み上げることができたため、北側に表土掘削の排土を置いた。人力掘削の排土は、主に南側に搬出した。重機が西側に順次掘削を終了するに従い、北側にも搬出できるよう搬出路を設けた。

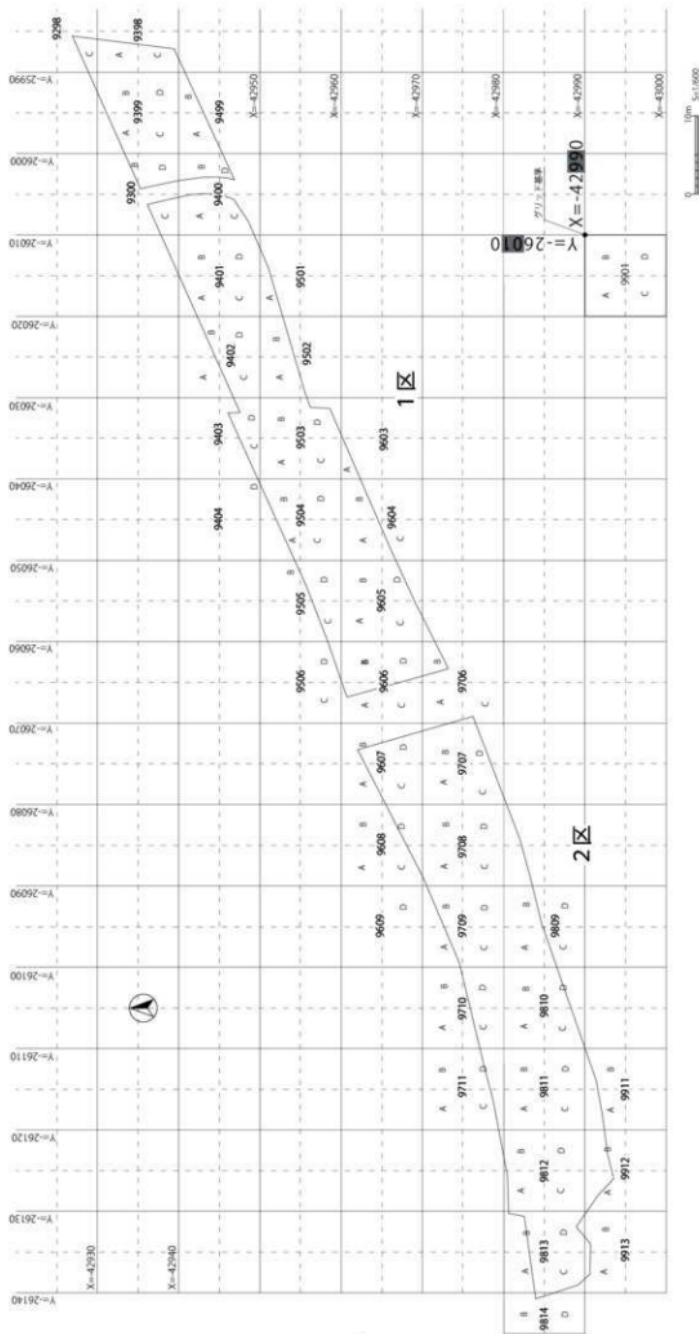
調査にあたっては、調査対象地に平面直角座標（世界測地系）に基づいて、5m間隔にグリッドを設置し、凡例に示している通りグリッド番号を付した。

記録作業については、遺構は主に手実測を行い、調査区・攪乱・等高線についてはトータルステーションから測点の座標を読み出し、方眼紙への転記を行う方法をとった。写真記録についてはデジタルカメラを使用し、Jpeg形式とRawデータで記録した。空中写真はドローンによる垂直写真撮影と斜め写真を撮影した。

第2節 層序

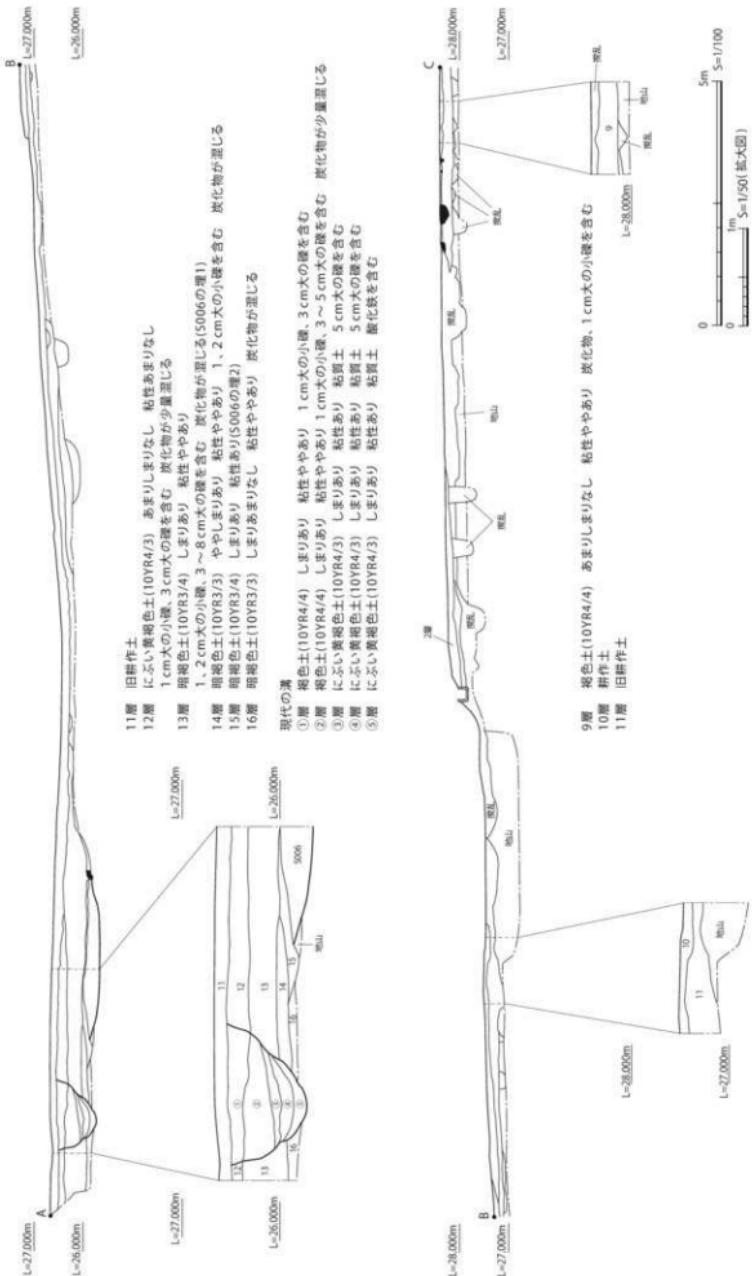
平成28年(2016年)1月の確認調査で調査1区西端部のNo.2トレーニングで大量の遺物を包含する黒褐色粘質土が報告されている。また、令和2年(2020年)7月の確認調査で、調査2区西端部のNo.4トレーニングでも同様の黒褐色粘質土が報告されていた。その他は地山に相当する黄褐色土が客土・耕作土の直下に存在し、地山がある程度削られていると考えられた。

第4図 中小野貝塚グリッド配置図

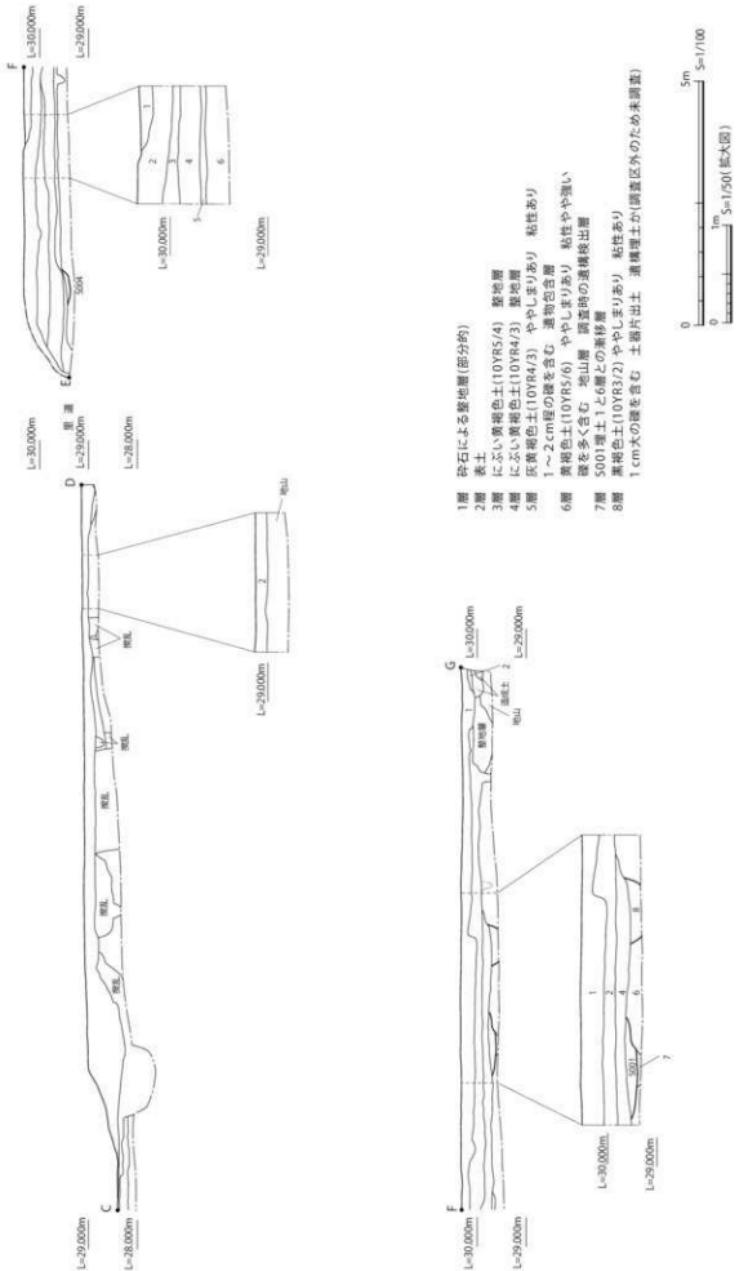


第5図 調査1区遺構配置図

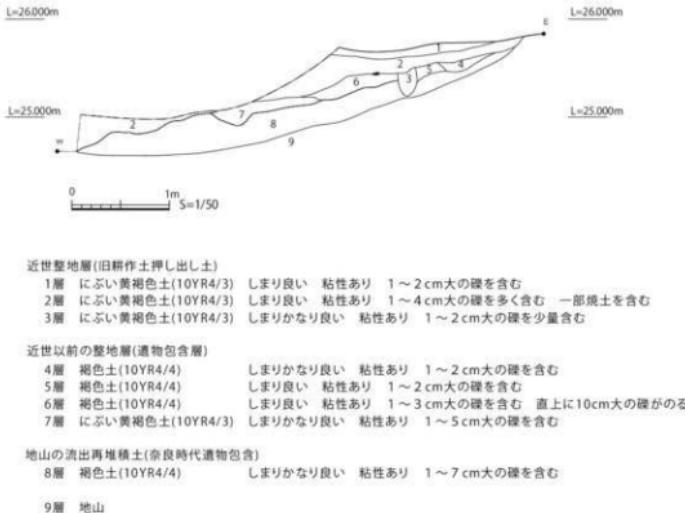




第6図 調査1区北壁土層断面図1

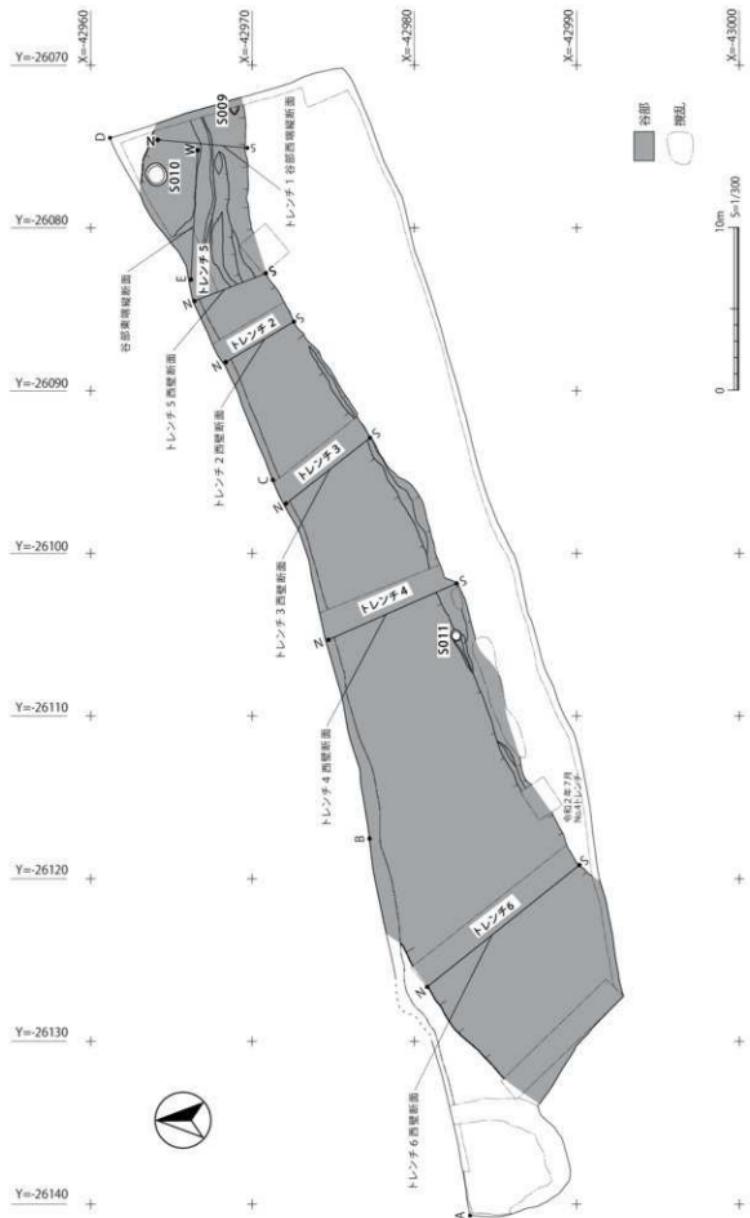


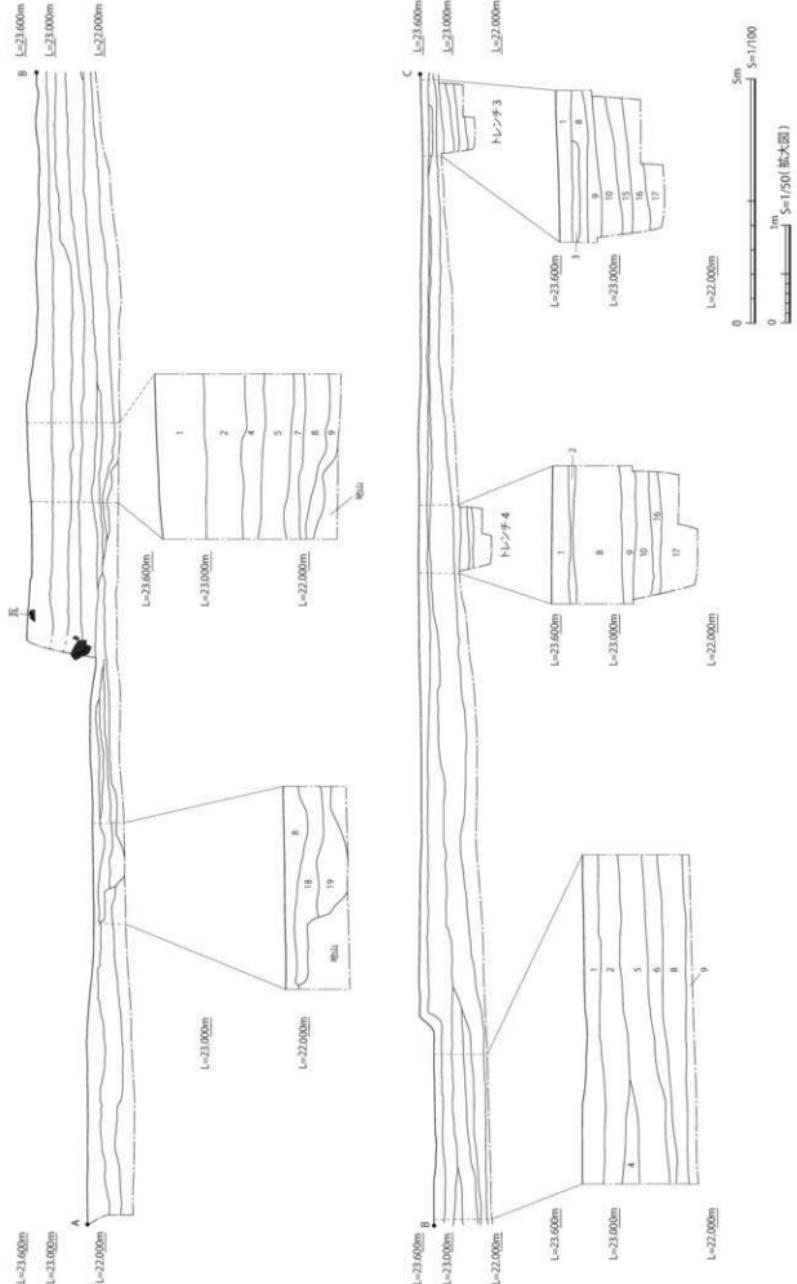
第7図 調査1区北壁土層断面図2



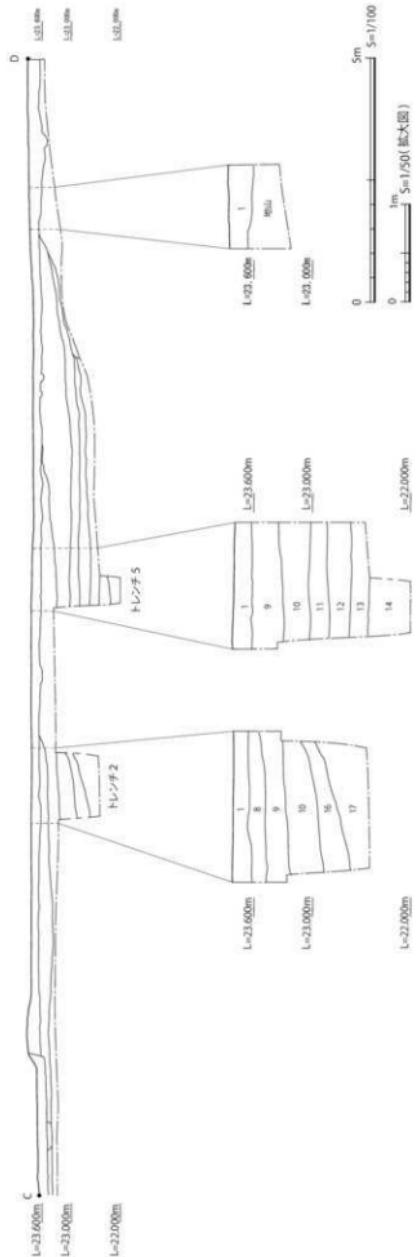
第8図 調査1区西端中央部土層断面図

第9図 調査2区遺構配置図





第10図 調査2区北壁土層断面図1



1層 表土、耕作土

2層 田耕土

3層 厚黄褐色土 (10YR4/2) あまりしまりなし 粘性ややあり 酸化鉄が混じる

4層 厚黄褐色土 (10YR4/2) 粘性あり 2cm厚の鐵、砂を含む 酸化鉄、マンガン鉄が混じる

5層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) ややしまりあり 粘性あり 砂を含む 酸化鉄が混じる 粘土が混じる

6層 厚黄褐色土 (10YR4/2) ややしまりなし 粘性あり 酸化鉄、炭化物が混じる 1～2cm厚の小鐵が混じる

7層 厚褐色土 (10YR4/4) あまりしまりなし 粘性ややあり 酸化鉄が混じる 2cm程の隙間、砂を含む 1～2cm厚の小鐵、5～10cm厚の鐵が混じる。粘土、遺物が混じる

8層 褐褐色土 (10YR3/3) ややしまりあり 粘性ややあり 酸化鉄、炭化物が混じる 1～2cm厚の小鐵、3～5cm厚の隙間を少々含む 砂が層状に入り込んでいる 遺物を含む

9層 褐褐色土 (10YR3/3) ややしまりあり 粘性あり 酸化鉄、炭化物が混じる 1～2cm厚の小鐵、4～7cm厚の隙間を少々含む 遺物を含む

10層 黒褐色土 (10YR3/2) ややしまりあり 粘性あり 酸化鉄、炭化物が混じる 1～2cm厚の小鐵、3～5cm厚の隙間が混じる

11層 黒褐色土 (10YR3/2) ややしまりあり 粘性あり 粘土、粘質土、炭化物が混じる 1～2cm厚の小鐵、3～10cm厚の隙間が混じる 遺物、有機物を含む

12層 黒褐色土 (10YR3/1) ややしまりあり 粘性あり 酸化鉄、炭化物が混じる 1～2cm厚の小鐵、3～5cm厚の隙間が混じる

13層 黒褐色土 (10YR3/1) あまりしまりなし 粘性ややあり 砂漠層、有機物が混じる 1cm厚の隙間が混じる

14層 黑褐色土 (10YR4/1) あまりしまりなし 粘性ややあり 砂漠層、有機物が混じる 1cm厚の隙間、3cm厚の大鐵が混じる

15層 にぶい黒褐色土 (10YR4/3) ややしまりあり 粘性あり 酸化鉄、炭化物が混じる 1～2cm厚の隙間、3cm厚の大鐵が混じる

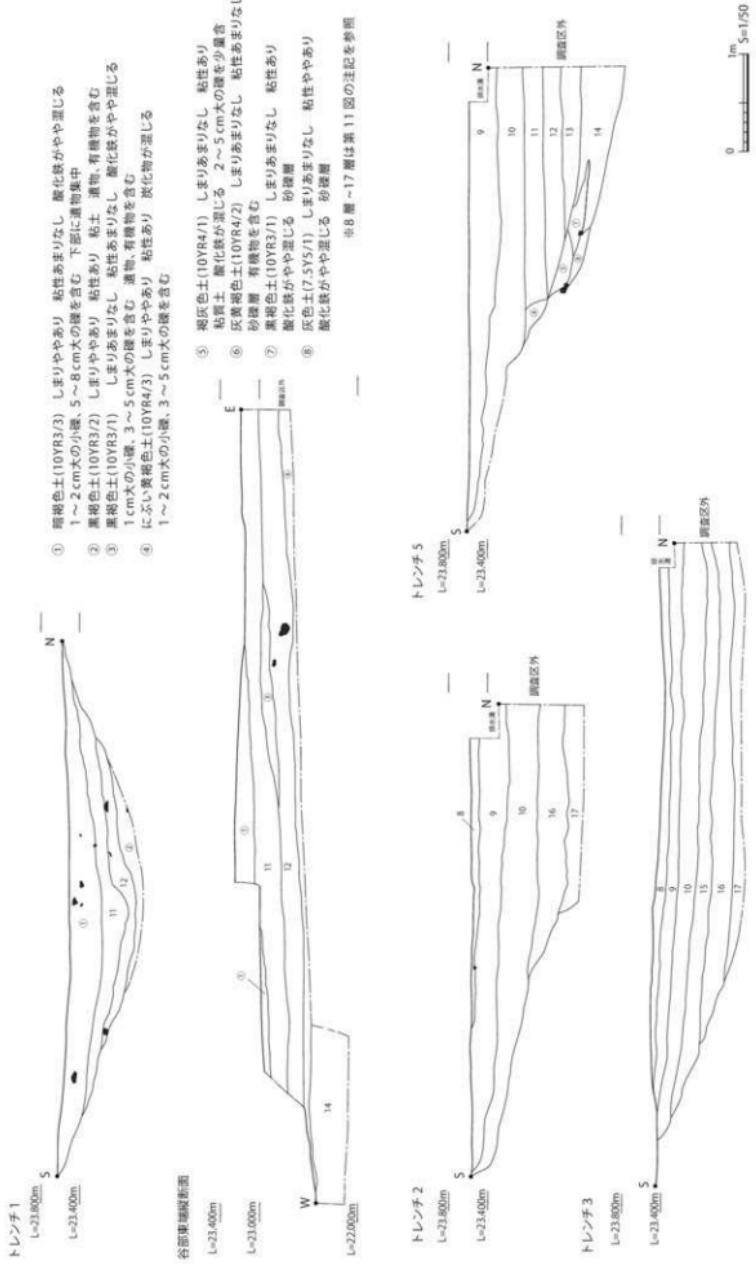
16層 にぶい黒褐色土 (10YR4/3) しまりあり 粘性あり 酸化鉄が多量に混じる 炭化物がややかじる 有機物を含む 1～3cm厚の大鐵、4～10cm厚の隙間が混じる

17層 黑褐色土 (10YR3/2) あまりしまりなし 粘性ややあり 酸化鉄が混じる 1～2cm厚の隙間、5～10cm厚の隙間が混じる 遺物を含む

18層 黑褐色土 (10YR4/4) あまりしまりなし 粘性ややあり 酸化鉄が混じる 1cm厚の隙間が混じる 1cm厚の隙間を含む

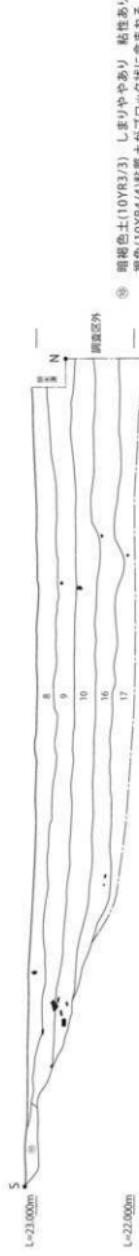
19層 にぶい黒褐色土 (10YR4/3) あまりしまりなし 粘性ややあり 酸化鉄が混じる 1～2cm厚の隙間を含む

第11図 調査区2北壁土層断面図2

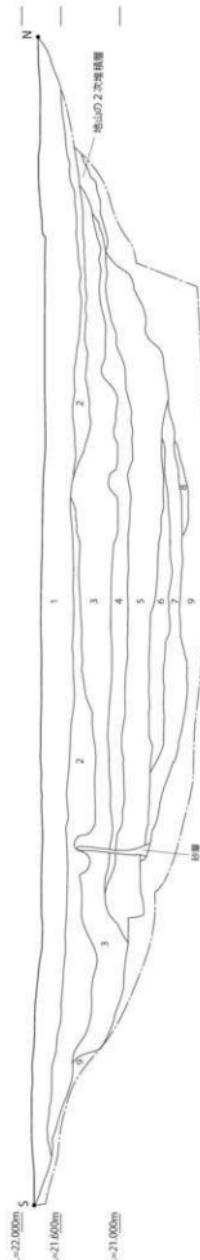


第12図 調査2区トレシチ1~3・5土層断面図、谷部東端縦断面図

トレンチ 4

 $L=21400m$ 

トレンチ 6

 $L=22,000m$ $L=21,000m$ 

谷部東側断面割り面図

- 1層 増粘地色土(10YR 3/4) しまりあまりなし。粘性あり 鋼化鉄を含む 2～5cm大の隙を含む ブロック状に砂が混じる
 2層 深灰地色土(10YR 4/1) しまりなし。粘性強い 1層との境に鋼化鉄を多く含む 2～3cm大の隙を少く含む 粘土層
 3層 黃灰地色土(7.5Y 4/1) 土質は2層に類似 やや變化のようない塊角を多く含む 粘土層
 4層 灰色土(7.5Y 4/1) しまりなし。粘性強い 2cm大の隙、砂を含む 粘土層
 5層 灰色土(7.5Y 4/1) 土質は4層に類似 粘土層
 6層 黄オーブ灰地色土(15G 4/1) 土質は4層に類似 粘土層
 7層 オーブ裏地色土(5Y 3/1) 土質は4層に類似 細かな砂を多く含む 下以下の地山層(9層)との境に泥水底
 8層 黒地土(10Y 2/1) しまりなし。粘性ややあり 砂層
 9層 地山

第13図 調査2区トレンチ4・6土層断面図

第3節 遺構及び遺物

1 遺跡の概要

調査区は東西に長く延びる。地形は調査1区東側から調査2区西側に向かって低くなっていく。調査2区では西に向かって落ち込んでいく谷部を検出しており、谷部では自然流路の堆積物や整地に伴う整地層を確認した。調査1区では畠地の耕作土や近現代の建物による削平が多く見られた。

【調査1区】

(1) 東端部

表土直下に旧耕作土が確認できる。地山は東から西に緩やかに下がり、南北方向では南にやや下がるほど平坦な地山を検出する状況であった。

(2) 中央部

擾乱や旧建物に伴うと考えられる擾乱が多くみられた。表土は現代のゴミの混じる土である。西端では旧地境に沿って南北に0.5mほどの段差があり、この段差上にも重機のバケット痕などが見られた。

(3) 西端部

調査着手時には西に極めて緩やかに下がる畠地であった。表土は耕作土であるが、耕作土としてこなれていない新しい土であり、客土の可能性が高い。東側では耕作土下で地山が検出でき、L字状に屈曲し、新旧重複した擾乱を検出した。地山は西に緩やかに下がり、間層が出現し厚みを増す。この間層は礫を含むにぶい黄褐色土と礫を含む褐色土からなる。にぶい黄褐色土には近世陶器の小片が含まれ、褐色土には中世陶器片が含まれていた。西端では須恵器を含む黒色土が間層下に現れ漏斗状に急に落ち込む。

【調査2区】

東端部では耕作土の表土直下で地山、北側で調査1区の西端で黒色土を検出した。この黒色土は調査2区の西端まで直線的に調査区を斜めに横切る谷部の堆積土である。地山の高さは東端で標高23.6m、西端で21.8mを測りおよそ60mで1.8mの比高となる。谷部の堆積は大きく2層に分けられ、下層は流路による自然堆積層で上層は南北に水平な堆積が認められ、人工的な埋立てと考えられる。

2 遺構及び遺物

【調査1区】

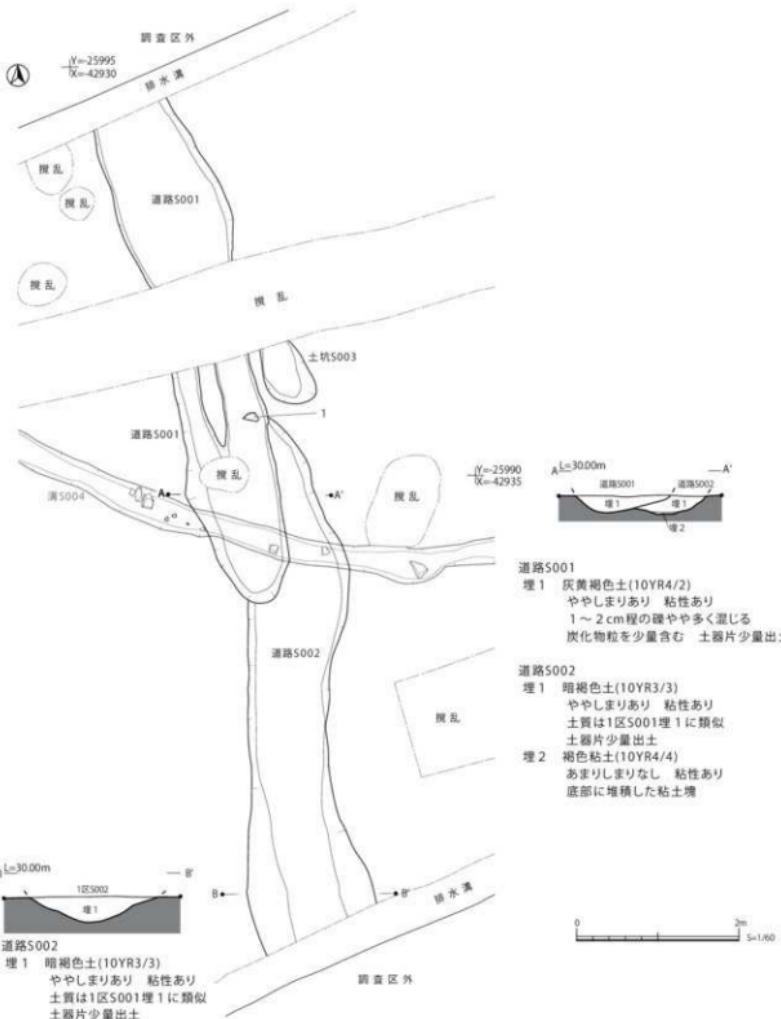
(1) 道路（第14図）

道路S001・道路S002

調査1区で道路S001と道路S002の2条を検出した。道路S001の最大幅は1.36m、南北に6.20mを測り、北側調査区外に伸びる。断面はレンズ状に崖み、0.2m程の深さである。道路S001は道路S002の上から掘り込まれている。道路S002の最大幅は1.51mで、断面はレンズ状で深さ0.3mを測り、道路S001の南側に向かって伸びる。道路S001・S002は地山に掘り込まれていた。遺構の埋土は道路S001が1層、道路S002が2層からなる。道路S001と道路S002の両方とも床面に硬化面は検出できていないが、遺構の向きが近くの里道の向きと同じで南北に延びるため、道路の役目をもつ遺構と判断した。

道路S001及び道路S002からは良好な遺物は出土していない。道路S001から出土しているのは土師器甕と思われる土器片（第21図1）、須恵器及び黒色土器の小片（図版3-4）である。須恵器は口縁部であるが小片のため器種は不明である。黒色土器片はA類の碗で底部である。これも小片のため全形は不明である。

道路S002からは須恵器の口縁部片（図版3-5）が2点、青磁の口縁部片（第21図2）が1点出土している。青磁外面の口縁近くには横向きの二重の線文があり、下にも雑に横線が入る。龍泉窯系青磁と思われる。



第 14 図 道路 5001・5002 実測図

(2) 溝（第15図）

溝S004

調査1区で北から南東に延び、途中でさらに東に折れる溝である。道路S001と道路S002が重なる地点で、両道路の下に溝を確認している。検出面からの底面までの深さは場所によって異なるものの、底面のレベルはほとんど変わらない。幅は東に向かって広がっている。

遺物は出土していない。

(3) 土坑（第16・17・18図）

調査1区で土坑を5基検出している。土坑S003、土坑S005と土坑S007を調査1区東側で検出し、土坑S006と土坑S008を調査1区西側で検出している。

土坑S003

調査1区東側に位置し、長径0.8m、短径0.54m、深さ0.1mの土坑である。炭化物を少量含み、埋土中から土器片（図版3-6）が出土した。

遺物は須恵器の蓋破片1点と土師器甌の口縁部破片が1点が出土した。須恵器の蓋は全形は不明である。土師器も小片で全形は不明である。

土坑S005

調査1区東側に位置する。長径0.8m、短径0.72m、検出面からの深さ0.27mを測る。

遺物は石核（図版3-7）が1点出土した。

土坑S007

調査1区東側に位置する。長径1.66m、短径1.3mを測る。後世の削平により深さは不確かだが、検出面から0.28mを測る。

遺物は土師器皿（第21図4）が出土した。口径8.0cm、器高1.5cmの小皿である。底部には糸切り離し痕が残る。

土坑S006

調査1区西側に位置し、埋3層は混貝土層である。南北に長いが北側は調査区外になる。南北径が2.8m、東西径が3.12m、深さ0.24mを測る。既往調査報告では「ポケット状貝塚」と呼ばれていた遺構である。土坑は南北に細長く平面楕円形である。

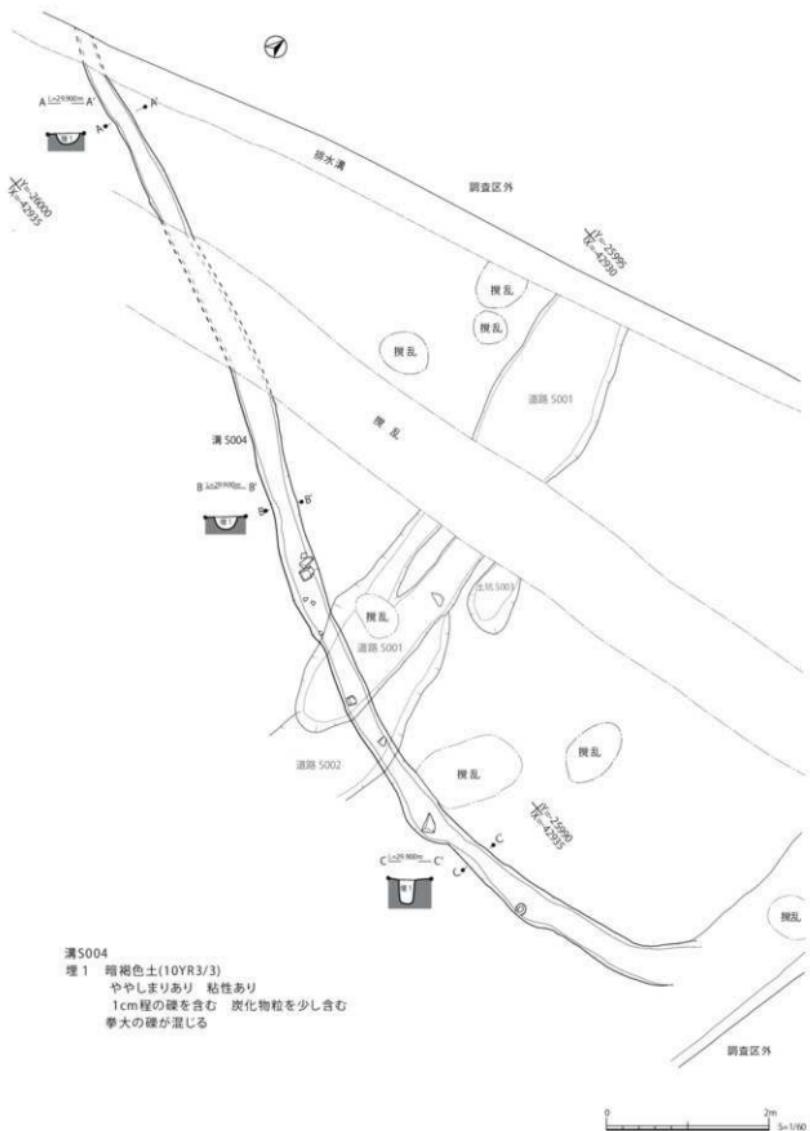
混貝土層に含まれていた貝には、タマガイ科、ハイガイ、マガキ、二枚貝綱（アサリ科）、その他貝小片が同定され、生息域が異なる貝が混在していた。詳しくは第IV章自然科学分析に掲載している。

土器が含まれていたが、残りはよくない。土師器の口縁部であるが器種は不明のものや厚みがある土器片で小片で器種不明のものなどである。遺構の底面から染付皿片（第21図3）が出土している。見込みに梅の文様、口縁には茶色の紅を施す。染付皿が土坑底部にあったことから、近世以降に貝類も廃棄されたと考えられる。

土坑S008

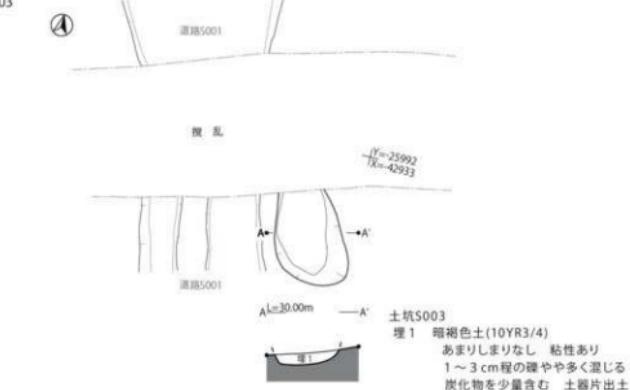
調査1区西側に位置する。南北に長く、長径2.1m、短径1.45m、深さ0.38mを測る。

土師器の皿5点（第21図5～9）、土師器の杯1点（第21図10）が出土した。土師器皿は、口径7.6cmのものが2点あるが、あと3点は8cm台の小皿である。器高は1.2cmから1.8cmの範囲にある。どれも底部には糸切り離し痕が残る。土師器の杯は口径14.2cm、器高3.6cmを測る。底部の角は未調整である。

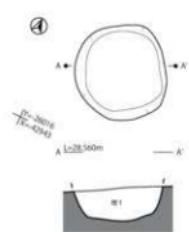


第 15 図 溝 5004 実測図

土坑S003

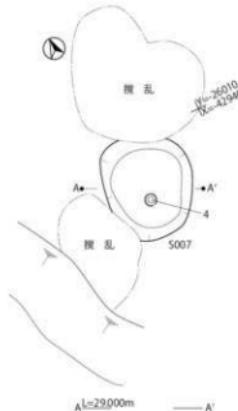


土坑S005



土坑S005
埋1 暗褐色土(10YR3/4)
しまりあり 粘性あり
1cm大の礫をやや多く含む

土坑S007

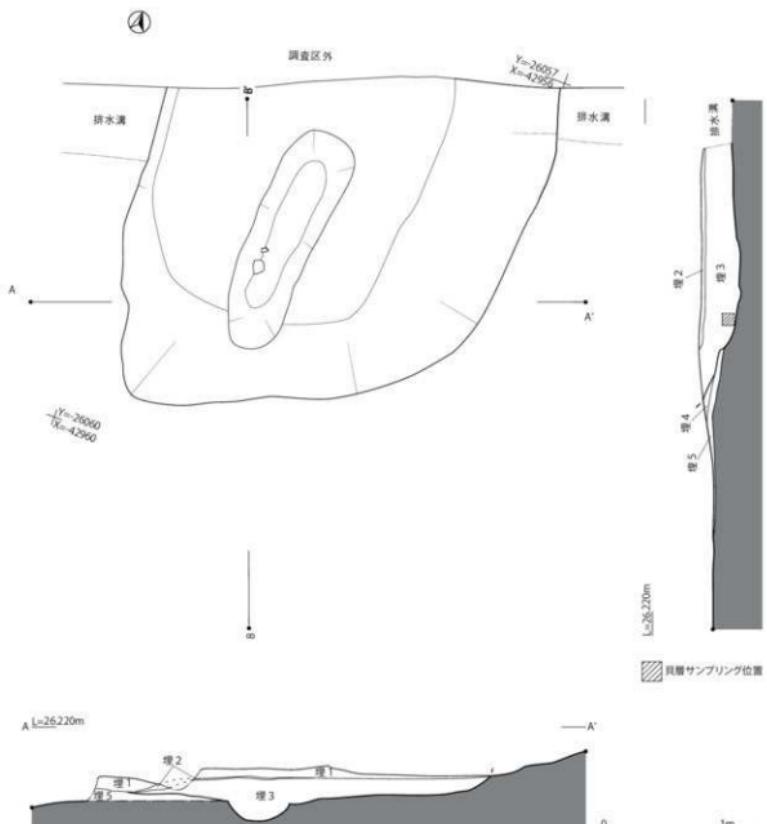


土坑S007
埋1 黒褐色土(10YR3/2)
しまりあり 粘性あり
1~5cm大の礫を含む
炭化物、焼土粒を含む

0 1m 5=1/40

第16図 調査1区土坑実測図1

土坑S006

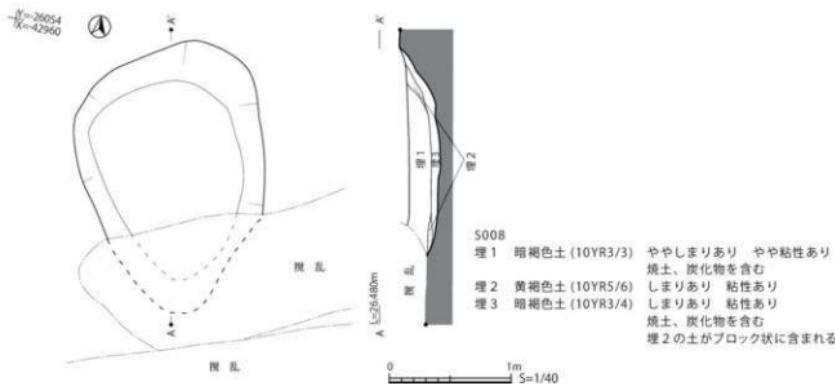


S006

- 埋1 暗褐色土(10YR3/4) しまり良い 粘性あり 粘質土 2~3cm大の礫を含む 一部に焼土を含む 土坑S006を覆っている
- 埋2 暗褐色土(10YR3/4) しまり良い 粘性あり 粘質土 土坑S006を覆っている
- 埋3 暗褐色土(10YR3/3) しまり良い 粘性あり 混貝土層 層下部より遺物が出土 カキ、ハイガイなどを含む 土坑S006の埋土
- 埋4 暗褐色土(10YR3/4) しまりあり 粘性あり 粘質土 本層を掘り込んで埋土3層が形成されている
- 埋5 暗褐色土(10YR3/4) しまりあり 粘性あり 粘質土 一部に焼土を含む 本層を掘り込んで埋土3層が形成されている

第17図 調査1区土坑実測図2

土坑 S008

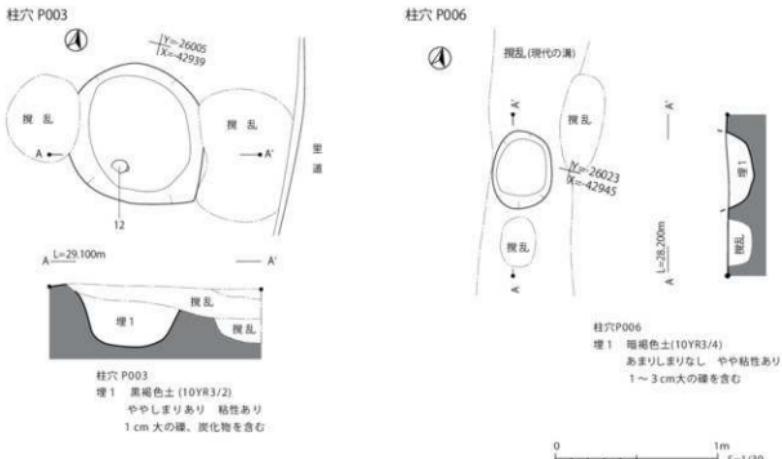


第18図 調査1区土坑実測図3

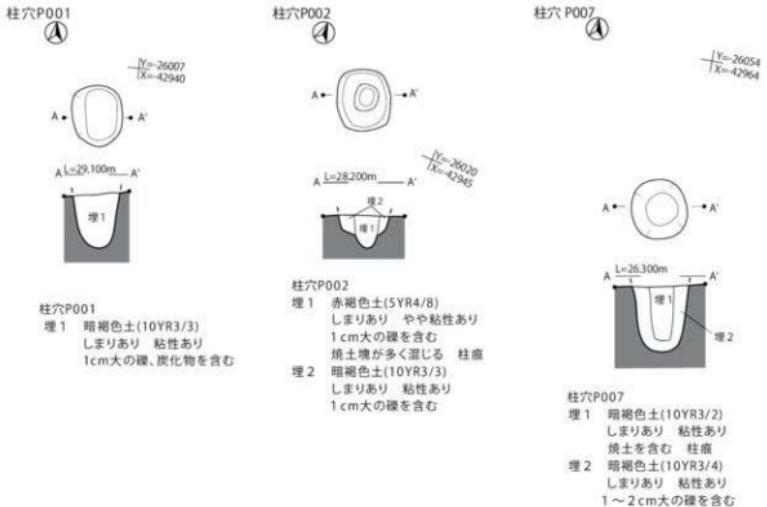
(4) 柱穴 (第19・20図)

調査1区に7基の柱穴を確認した。調査1区東側で柱穴P001と柱穴P003、調査1区中央付近で柱穴P002、柱穴P004、柱穴P005、柱穴P006、調査1区西側で柱穴P007を検出した。調査1区中央付近の4つの柱穴が方形に近い形であるが、南北間に擾乱が多く、南北に離れた柱穴で建物としては確定できなかった。

遺物が出土したのが調査1区東側里道近くの柱穴P003である。土師器皿(第21図12)が出土した。口径7.5cmと小さく器高2.3cmで見込み部分に煤の痕が残り、底部は糸切り離し痕が残る。灯明皿として使用されたものであろう。

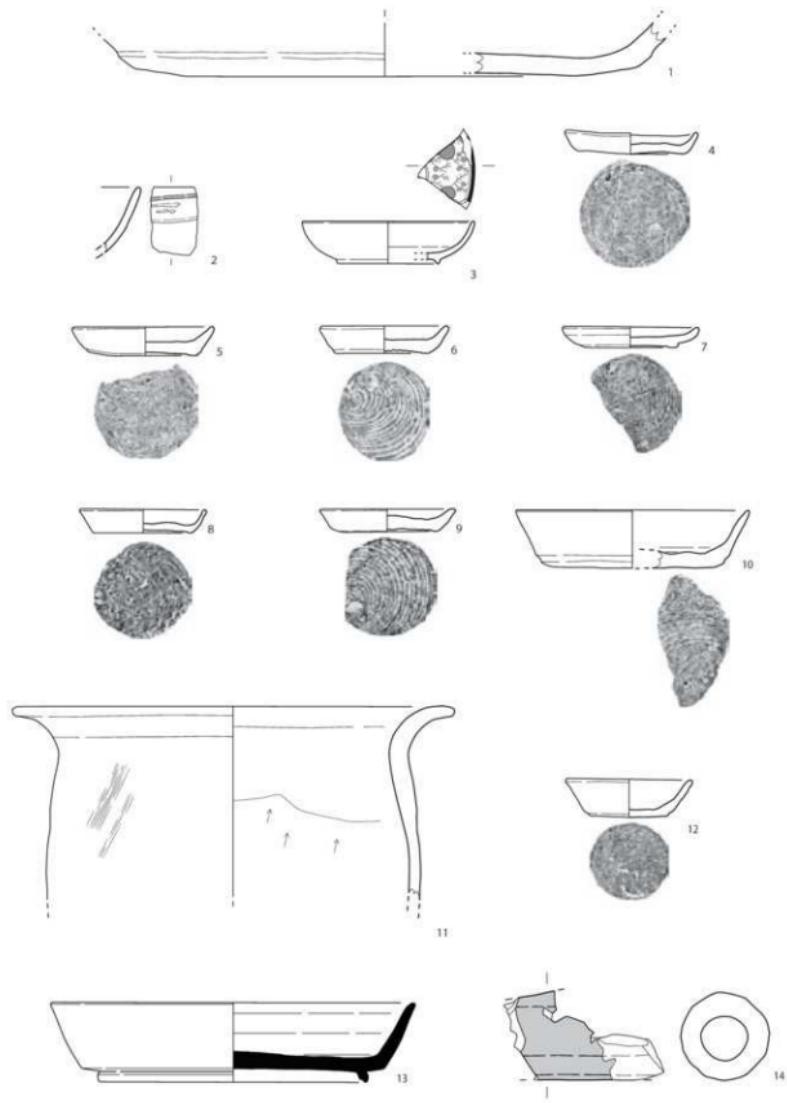


第19図 調査1区柱穴実測図1



0 1m 5/1/30

第20図 調査1区柱穴実測図2



1、2：道路S001 3：土坑S006 4：土坑S007 5～11：土坑S008 12：柱穴P003 13、14：96060 グリッド

0 10cm
5cm
1/3

第21図 調査1区遺構等出土遺物実測図

【調査2区】

(1) 土坑 (第22・23・24・25・26図)

調査2区には谷部が形成され、北東部から西に向かって下がる。その谷部で3基の土坑を確認した。

土坑S009

調査2区の谷部左法面の頂部に近いところで検出し土坑の東側は調査区外になる。遺構の上層では土器が集中して出土した。南北径0.54m、東西径0.55m、深さ0.18mを測る。

土坑S009からは須恵器の蓋片、土師器碗が出土している。実測が可能であった土師器碗が3点あった。土坑底面に伏せた状態で土師器碗(第24図15)が出土した。

土坑S010

調査2区東側谷部法面の頂部に近いところで検出した。平面形は円形で、東西径1.4m、南北径1.28m、深さ0.18mを測り、土坑S009と比べてかなり大きい土坑である。

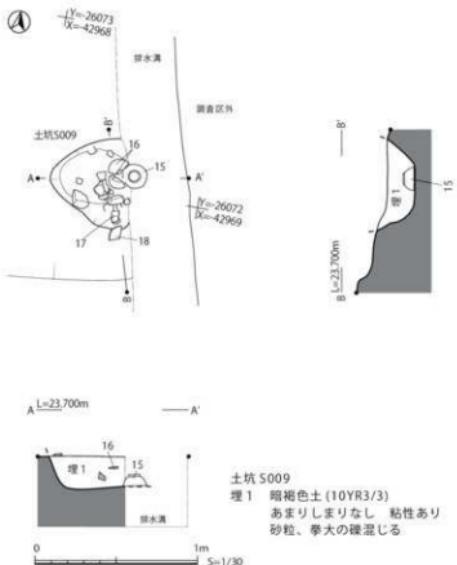
土坑内から鉄滓2.41kgと韁の羽口(第26図19)が出土した。土坑周辺の谷部からも鉄滓が出土している。谷部の黒褐色土で表土から80cmまでの範囲の各10cm毎の層で、どの層でも鉄滓を確認している。この遺構内の遺物は原位置を保っているとは考えにくく、廃棄又は整地等の際に移動してきたものと思われる。今回の調査で鍛冶遺構は見つかっていないが、近くで鍛冶がおこなわれていた可能性を考えられる。

土坑S011

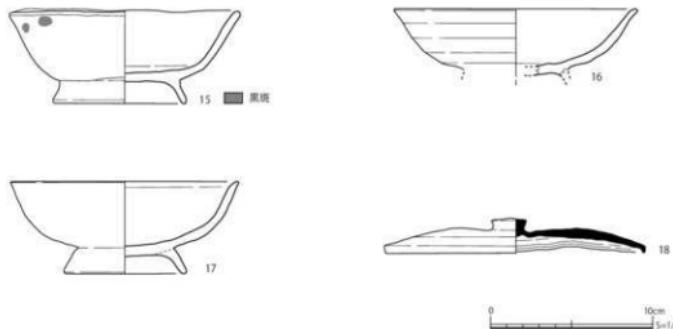
調査2区谷部西側の法面上端付近で検出した。平面形が円形の南北径0.64m、東西径0.7m、検出面からの深さ0.28mを測る。土坑内に焼土や土器が含まれていた。土師器と須恵器の甕(第26図20・21)、蓋で、蓋は器高が低い。いずれも全形は不明である。



第22図 調査2区谷部土器流れ込み状況

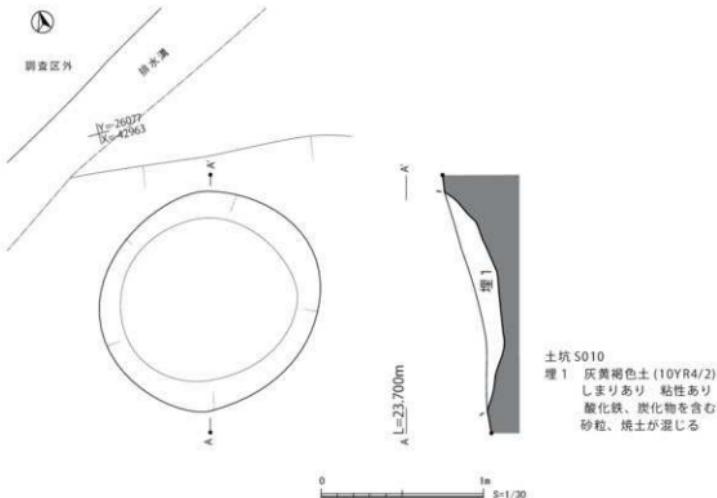


第23図 土坑S009 実測図

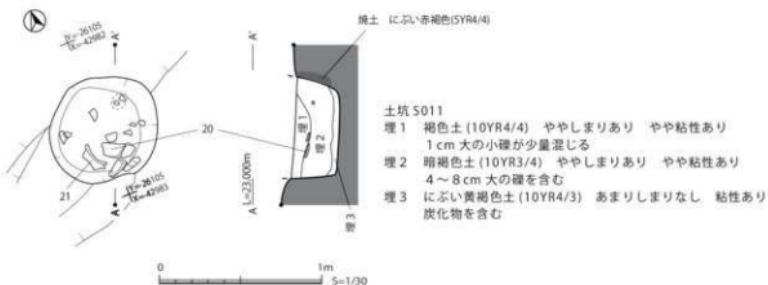


第24図 土坑S009 出土遺物実測図

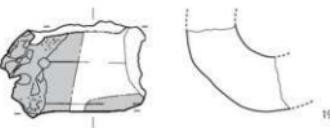
土坑S010



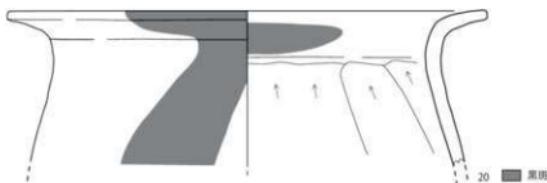
土坑S011



第25図 土坑S010・S011実測図

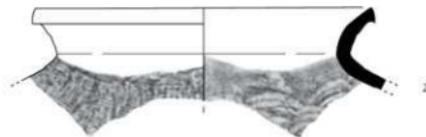


19



20

■ 黒斑



21

19:5010 20, 21:5011



第 26 図 土坑 S010・S011 出土遺物実測図

第2表 出土遺物観察表

土器

遺物番号	図版番号	出土地点	種別	器種	法量(cm)			色調		調整		胎土	備考		
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面				
1	21	3	S001	土師器 豆	—	(30.9)	残 2.3	楕	5YR7/6	5YR7/6	摩耗の為不明	摩耗の為不明	石英・白色粒 白色粒	取上 No. 1 内外面に黒斑	
4	21	4	S007	土師器 盆	8.0	6.8	1.5	楕	7.5YR6/6	ナデ	ナデ	ナデ	白色粒・砂粒	底部糸切り離し	
5	21	4	S008	土師器 盆	(8.5)	6.6	1.8	にぶい楕	SYR6/4	ナデ	ナデ	回転ナデ	石英・白色粒	底部糸切り離し	
6	21	4	S008	土師器 盆	(7.6)	6.0	1.7	楕	7.5YR6/6	ナデ	ナデ	回転ナデ	雲母・白色粒	底部糸切り離し	
7	21	4	S008	土師器 盆	(8.1)	(5.6)	1.2	にぶい黄楕	10YR7/4	ナデ	ナデ	ナデ	雲母・白色粒	底部糸切り離し	
8	21	4	S008	土師器 盆	7.6	6.0	1.5	楕	5YR6/6	ナデ	ナデ	回転ナデ	石英・赤色粒	底部糸切り離し	
9	21	4	S008	土師器 盆	(8.0)	6.0	1.4	楕	5YR6/6	ナデ	ナデ	回転ナデ	白色粒・砂粒	底部糸切り離し	
10	21	4	S008	土師器 杯	(14.2)	(11.3)	3.6	にぶい楕	7.5YR6/4	ナデ	ナデ	ナデ	雲母・長石	底部糸切り離し	
11	21	4	S008	土師器 豆	(26.6)	—	残	にぶい楕	12.0	ナデ	ナデ	ケズリ	雲母・砂粒		
12	21	4	P003	土師器 杯	7.5	4.8	2.3	にぶい黄楕	10YR7/4	ナデ	ナデ	摩耗の為不明	摩耗の為不明	黒色粒	底部糸切り離し 内面に黒斑あり
13	21	4	9606D須恵器	杯	(22.0)	高台径 (16.4)	4.9	黄灰	2.5Y6/1	ナデ	ナデ	回転ナデ	多方向のナデ	黑色粒	
15	24	4	S009	土師器 瓶	13.8	高台径 (8.0)	5.7	にぶい楕	7.5YR6/6	ナデ	ナデ	摩耗の為不明	摩耗の為不明	白色粒・雲母	調査時 2 区 S001 取上 No. 1
16	24	4	S009	土師器 瓶	14.8	—	残 4.2	にぶい黄楕	10YR6/3	ナデ	ナデ	ナデ	石英・輝石		調査時 2 区 S001 取上 No. 2
17	24	4	S009	土師器 瓶	(13.8)	高台径 7.2	5.7	浅黄楕	7.5YR8/4	ナデ	ナデ	ナデ	石英		調査時 2 区 S001 取上 No. 3
18	24	4	S009 9607C	須恵器 盖	(15.9)	—	2.1	黄灰	2.5Y5/1	ナデ	ナデ	回転ヘラ切り	砂粒・白色粒	調査時 2 区 S001 取上 No. 4	
20	26	4	S011	土師器 豆	(29.3)	—	残 9.6	楕	7.5YR6/6	ナデ	ナデ	ハケメ・ケズリ	白色粒・石英		調査時 2 区 S003 取上 No. 2
21	26	4	S011	須恵器 豆	(20.6)	—	残 5.1	灰	5Y5/1	ナデ	ナデ	タタキ	白色粒・砂粒		調査時 2 区 S003 取上 No. 1

土製品

遺物番号	図版番号	出土地点	種別	器種	法量(cm)			色調		調整		胎土	備考	
					径	内径	長さ	外面	内面	外面	内面			
14	21	—	9606D	—	鉢口	5.2	2.9	残 9.9	楕	7.5YR6/6	工具ナデ	—	白色粒・砂粒	装着角度 21°
19	26	5	S010	—	鉢口	(10.8)	(4.6)	残 8.9	にぶい楕	SYR6/4 黒褐 SYR2/1 黒褐 SYR4/1	工具ナデ	—	白色粒・砂粒 石英	調査時 2 区 S002 装着角度 10°

陶磁器

遺物番号	図版番号	出土地点	種別	器種	法量(cm)			色調		調整		胎土	備考	
					口径	底径	器高	胎土	釉	外面	内面			
2	21	3	S002	磁器 青磁碗	—	—	残 4.1	海老の頭の緑 C - 217	艶灰色 C - 143	施釉	施釉	艶密		小片のぬれき不確実
3	21	3	S006	磁器 染付皿	(10.4)	高台径 (6.2)	2.6	亞鉛草の白 C - 164	淡青 C - 262	施釉	施釉	艶密		口脇部に茶色 (褐色 C - 128)

1はじめに

中小野貝塚群は、熊本県宇城市小川町（旧下益城郡小川町）大字中小野に所在する。発掘調査において、貝類の集積が検出されている。

本報告では、中小野貝塚における貝類利用を明らかにすることを目的として、貝類同定を実施する。

2 試料

試料は、調査1区土坑S006埋3層（混貝土層）より採取された一片15cmの直方体ブロックサンプル1点である。

3 方法

試料（堆積物）に以下の物理処理を施して、抽出および同定を行う。

- 1) 土壌サンプルに水を加えて泥化する。
- 2) 搅拌後、沈んだ砂礫を除去しながら5mmと1mmの篩で水洗選別する。
- 3) 残渣を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、貝類の同定・計数を行う。

同定は、形態的特徴および現生標本と対比して行い、結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

4 結果

貝類の腹足綱（タマガイ科）1、二枚貝綱（ハイガイ、マガキ、その他）3の計4分類、種実の草本1分類が同定された。同定結果を表1に示し、主要な分類群を写真図版に示す。

表1 中小野貝塚における貝類ほか同定結果

調査区 遺構名	篩	分類群		部位	左	右	数量	重量 (g)	備考
		学名	和名						
1区 S006	5mm	Naticidae	タマガイ科	略完			1	0.68	
		Bivalvia	二枚貝綱	破片			4	0.67	アサリ？
		<i>Tegillarca granosa</i>	ハイガイ	略完	4	4	8	93.31	左26.93g、右66.38g
		<i>Crassostrea gigas</i>	マガキ	破片	9	2	11	38.02	左26.40g、右11.62g
	1mm	Shell	貝類	細片			(+++)	155.23	石11
		<i>Oryza sativa L.</i>	イネ	炭化果実			2	68.45	石(+)、炭化物(+)
								0.01以下	未成熟

1) 貝類

タマガイ科1点、ハイガイ8点（左4、右4）、マガキ破片11点（左9、右2）、二枚貝綱（アサリ？）破片4点が同定された。ほかに貝類細片が多数認められた。

2) 種実

イネ炭化果実2点が同定された。いずれも未成熟である。

5 所見

同定された貝類はいずれも海産である。タマガイ科は潮間帯から数千mの深海までの様々な水深の砂地に生息する。ツメタガイなど食用とされるものがあるが、主にアサリ漁やホッキ漁などの際の混獲である。ハイガイは潮間帯下の泥底に生息し、タマガイ科同様にアサリ漁などでの混獲が多い。なお、当該遺構からはアサリ？の破片が認められている。タマガイ科やハイガイの出土から、アサリの漁獲があつた可能性があり、アサリ？はアサリの可能性が考えられる。マガキは内湾から河口域の潮間帯から潮下帯の岩礁域に生息する。漁獲法は素潜り漁が主体であることから、混獲された可能性は考えにくい。いずれも食用となる海産貝類であり、利用されたのちに廃棄されたものであろう。またタマガイ科、ハイガイとマガキでは生息域が異なり、砂地のある海域でタマガイ科およびハイガイが、岩礁域でマガキが漁獲され、本遺跡に持ち込まれたものと考えられる。

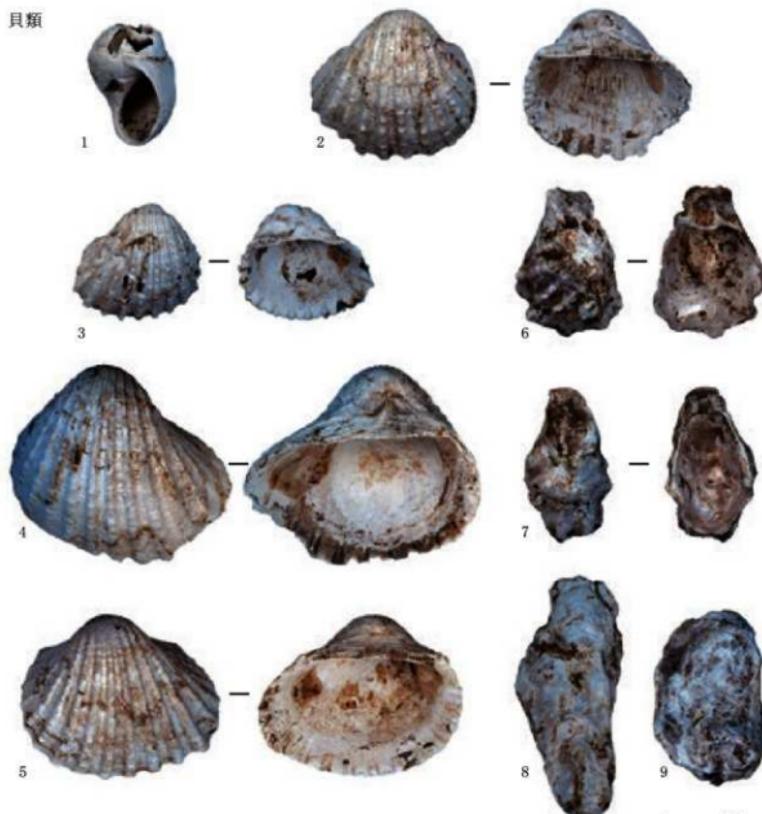
貝類以外にイネ炭化果実が認められた。大きさは小さく未成熟である。検出数が少ないため、2次堆積の可能性がある。

参考文献

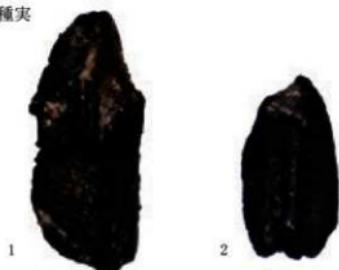
- 曳谷喬司（2001）日本近海産貝類図鑑，東海大学出版会
望月賢二（2005）魚と貝の事典，魚類文化研究会，433p.
笠原安夫（1985）日本雜草図説，養賢堂，494p.
南木睦彦（1991）栽培植物、古墳時代の研究第4巻生産と流通Ⅰ，雄山閣出版株式会社，pp. 165–174
南木睦彦（1993）葉・果実・種子，日本第四紀学会編，第四紀試料分析法，東京大学出版会，pp. 276–283

写真図版 I 中小野貝塚出土貝類・種実

貝類



種実



貝類

1. タマガイ科
2. ハイガイ 右
3. ハイガイ 右
4. ハイガイ 左
5. ハイガイ 左
6. マガキ 左
7. マガキ 左
8. マガキ 右
9. マガキ 右

種実

1. イネ炭化果実
2. イネ炭化果実

1-2 — 1.0 mm

第V章 総括

第1節 調査の成果

今回の調査で確認できた主な遺構は、道路2条、溝1条、土坑が調査1区で5基、調査2区で3基、柱穴が調査1区で7基である。また東から西に向かって傾斜している谷を確認した。この谷部の法面に周辺から流れ込んだと思われる遺物が見られた。谷部を埋めるのに周辺の土砂が使用されたものと思われる。周辺の土と一緒に古代から現代に至る遺物を含んでいた。

遺構はどれも地山に掘り込まれたもので、上層は耕作土及び整地層である。遺物は度重なる整地や掘削により搅乱されたものが多い。調査1区土坑S003から8世紀頃と思われる須恵器の蓋が見られることから遺跡の上限を8世紀頃と考えている。他の遺構から出土した遺物は古代から中世にかけてのものである。柱穴P003からは灯明皿を出土し、また、土坑S008や土坑S009からは土師器皿や土師器碗を出土している。遺跡の時期の下限については、染付皿が出土している土坑S006以外は中世の範囲に収まるので、中世以前と想定している。

この遺跡は、中世以前には人の生活域で、周囲には畠などの耕作地が囲っていたと思われる。また、古代には流路として利用されていた谷も中世から近世にかけて埋められ平地として利用され、ほぼ現在にも通じる生活空間となったと思われる。

第2節 今後の課題

今回の調査で1区土坑S006で混貝土層が検出されたが、近世以降の遺物を伴うことが確認された。縄文時代の遺物を含むいわゆる「縄文時代の貝塚」と呼ぶ貝層は検出していない。

中小野貝塚の北側に接する位置に小野莊館跡の遺跡があり、熊本県文化財調査報告第17集『竹崎城』に13世紀から14世紀に及ぶ「小野莊中世館跡」として報告されている。今回の調査では、遺構から土師器皿や龍泉窯系青磁が出土しており小野莊館の時期と重なる時期のものもあるが、今回の調査では、小野莊館跡との直接の関連は見いだせていない。



1. 道路 S001 完掘状況(北から)



2. 道路 S002、土坑 S003 完掘状況(北から)



3. 溝 S004 完掘状況(東から)



4. 溝 S004 完掘状況(西から)



5. 土坑 S005 完掘状況(南から)



6. 土坑 S006 貝集積検出状況(南から)



7. 土坑 S006 貝層断面(西から)



8. 土坑 S006 完掘状況(南から)

图版 2



1. 土坑 S007 完掘状況（西から）



2. 土坑 S008 遺物出土状況（西から）



3. 土坑 S008 完掘状況（西から）



4. 調査 1 区西側落込み部完掘状況（北から）



5. 土坑 S009 遺物出土状況（俯瞰）



6. 土坑 S009 完掘状況（俯瞰）



7. 土坑 S010 完掘状況（西から）



8. 土坑 S011 遺物出土状況（俯瞰）



1. 土坑 S011 完掘状況（南から）



2. 調査 2 区谷部検出状況（東から）



3. 道路 S001 出土遺物



4. 道路 S001 出土遺物



5. 道路 S002 出土遺物



6. 土坑 S003 出土遺物



7. 土坑 S005 出土遺物

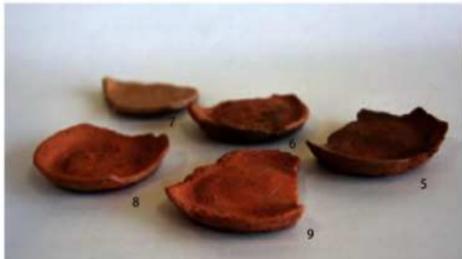


8. 土坑 S006 出土遺物

图版 4



1. 土坑 S007 出土遗物



2. 土坑 S008 出土遗物



3. 土坑 S008 出土遗物



4. 土坑 S008 出土遗物



5. 柱穴 P003 出土遗物



6. 9606D グリッド出土遗物



7. 土坑 S009 出土遗物



8. 土坑 S009 出土遗物

図版5



1. 土坑 S010 出土遺物



2. 土坑 S011 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	なかおのかいづか						
書名	中小野貝塚						
副書名	一般県道下郷北新田線社会资本整備総合交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告						
シリーズ名	熊本県文化財調査報告						
シリーズ番号	第344集						
編集者名	後藤克博						
編集機関	熊本県教育委員会						
所在地	〒862-8609 熊本県中央区水前寺6丁目18番1号						
発行年月日	令和4年(2022年)3月15日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 道路番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
なかおのかいづか 中小野貝塚	熊本県宇城市 小川町中小野	344	012	32°36'45"	130°43'23" 2020.10.13 ～ 2021.3.15	2.237m ²	道路建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
中小野貝塚	包蔵地	古代 中世	溝 道路 土坑	土師器碗・皿 須恵器 青磁碗			
要約	<p>中小野貝塚の調査では、近世以降の小規模な混貝土層は見られたものの、中世以前の貝塚は確認できなかった。確認できた遺構はほぼ古代から中世にかけての遺構である。</p> <p>中小野貝塚では、調査1区で道路2条、溝1条、土坑5基及び柱穴7基を確認した。調査2区では、土坑3基を確認した。</p> <p>土坑8基のうち土坑S006の貝の集積を伴う土坑から染付皿が出土しているが、その他の土坑は古代末から中世にかけての遺物が出土した。柱穴P003からは灯明皿が出土し、道路からも古代末から中世にかけて遺物が出土している。</p> <p>このことから、この遺跡では古代から中世にかけて人の生活の痕跡がみられ、近世以降につながっていると想定した。</p>						

熊本県文化財調査報告 第344集

中小野貝塚

一般県道下郷北新田線社会資本整備総合交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

発行年月日 令和4年（2022年）3月15日

発 行 熊本県教育委員会

印 刷 熊本県熊本中央区水前寺6丁目18番1号

印 刷 社会福祉法人

熊本県コロニー協会（コロニー印刷）

熊本市西区二本木3丁目12番37号

発行者：熊本県教育委員会
所 属：教育総務局文化課
発行年度：令和3年度（2021年度）

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第344集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：中小野貝塚

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦2023年1月13日